春燈

4 月号

April 2014

主宰の句

安立公彦

凍鶴の歩みとどむる遠けむり

寒星やひとは団居の灯を点し

侘助の一輪の紅春を待つ

枯草の雨に色ます二月かな

耕人の視野ひろびろと印旛沼

PDF= 俳誌の salon

成瀬櫻桃子の句

行年や日ざし溜めたる雑木山

「春燈」昭和五十四年

そばにある『櫻桃子選集』をなにげなく開く、と、そこに私を待ってでもいたかのようにこの句が目につく。この風景、それは私がいつも眺めている隣村の情景そのままで、その昼下りとも思える平穏な雰囲気に私はなぜか心の安らぎをさえ覚える。

『成瀬櫻桃子俳句選集』の「素心以後」の年代を見ると、作者は四十四、五歳の頃の句なのでは…。

山内四郎

PDF= 俳誌の salon

成瀬櫻桃子の句

放ちやる精霊とんぼ眼の濡れて

『風色』昭和四十八年

父との別離、神の子といわれるダウン症の娘を持ち、師の心はいつも泪を溜めていたことと思う。

『風色』のあとがきに「私はこれからの人生の持ち時間ある限り詠いつづけるであろうし、詠うために生きつづけようと努めるであろう。」と述べている。詠むべく対象を見る眼は濡れていた。それは詩へと昇華し、詠むことにより寧らぎを得ておられたのである。

木多芙美子

PDF= 俳誌の salon

燈下集

○　今井弘雄

着ぶくれて用心深くなりにけり
寒の水竜の口より賜れり
夜の雪駅の時計の針の位置
春待つや何を夢みし子の寝言
春灯や机一つの駐在所

○　竹内慶子

臘梅や札所によべのしづり雪
新婚の色よみがへりシクラメン
暮れのこる空の蒼さよ鶴啼けり
大寒のロックこぶしを高く挙げ
ちやんちやんこその場かぎりの嘘をつき

○　清水美子

春風を恋うて身をもむ枯木かな
ビル街の耳鳴り疼く虎落笛
笛吹き童子の揺らす三ヶ月恋御籤
初場所や妣の贔屓の勝越せり
日輪草のやうな笑顔や歌留多取

○　北岸邸子

煮凝に翻弄さるる箸の先
恙まみれの日々も自分史冬の雲
拆の入りて二代目揃ふ初芝居
凧揚ぐる子らの声ききつつ昼餉
黙々と餅の黴取る独りかな

PDF= 俳誌の salon

○　片山博介

読初は師に賜りし七部集
鳴竜の鳴いて落としし竜の玉
ドラキュラの知らぬ愉楽や日向ぼこ
実朝忌夕映え金を海に撒き
天狼や頬骨いよよ父に似て

○　宮沢治子

天守閣鳩翔つ空を恵方とす
筆始長き縁の吾が名かな
人日や遠き山河に父母の声
待春や唇にのるみすずの詩
雪女舞殿に佇つ夢消えず

○　府川昭子

木枯に昔影絵といふ遊び
日脚伸ぶ使ひ馴染みし古雑巾
水仙の香りもの憂さ連れて来る
明日葉を夕餉の菜と摘みにけり
山々の肩寄せ合うて眠りけり

○　永島雅子

参拝終へ仰ぐ神木冬芽出づ
雪の夜や窓の灯映ゆる白川郷
靴音を伴の家路や冬の星
一献を父へ供ふや雪の庭
地蔵菩薩並ぶ参道冬ざるる

○　鈴木撫足

茶畑の畝を波間の初日の出
そもそもは恋のかるたの御手付きに
水仙の野におしやべりの満ち満ちて
モンスター眷族集ふ樹氷林
山姥の噺にかたづ榾明り

○　矢口笑子

丁寧に掃く店先や実千両
絵馬に絵馬重ねて春を待ちにけり
自転車の軽きペダルや春立ちぬ
春ショール噂話に疲れけり
卓上のポットつぶやく余寒かな

PDF= 俳誌の salon

当月集

安立　公彦　選

○　　齋藤晴夫

蠟梅を透く武蔵野の深空かな
月光の漣たちぬ浮寝鳥
埋火や所作美しき小津映画
看取りするされるも同じ寒四郎
ぶきつちよな男の水仕日脚伸ぶ

○　　川崎真樹子

ちゆんちゆんと鉄瓶春を招きをり
タクト上ぐ春来る方を指すやうに
節分や身ぬちの鬼の高笑ひ
初めての嬰の寝返り春動く
青饅です位牌の父の返事待つ

○　　大西由美子

色褪せぬ妣の手編みの冬帽子
除夜の鐘ラジオもて聴く余韻かな
真つ新な明日を重ねむ初暦
肩傾げ触れ合ふ笑みや初詣
大股で歩く慣はしセロリ噛む

○　　中村紀美子

風つたふ臘梅の香や女人寺
固く固く結ぶ神籤や寒椿
白息に眼鏡くもらせ投函す
青竹の御手洗芳し寒の水
枯芝にかくれ和草青々と

○　　後藤眞由美

川風や初場所幟さんざめく
横綱の手形に合はす四温の手
春待つや旅道具入り箱枕（江戸東京博物館三句）
傾城の揺らぐまなざし冬桜
浮世絵の看護婦凛々し梅の花

PDF= 俳誌の salon

春燈の句

安立　公彦選

凍星を背に忘るる夜明け道　千葉　吉村さよ子

綿ぼこりころがる車内日脚伸ぶ

売出しの墓域決めかね冬終はる

臘梅の香りとけゆくもやの朝

わが影のいよよ小さし春隣　宮城　西川　春子

独り居のただ堪へかぬる余寒かな

息災や寒中挨拶したためて

春の雲仲よき父母の道行か

アユタヤの野焼を胸に終列車　バンコク　大口　堂遊

岩肌に憩ふ仏陀や春の風（バタヤ）

二日灸笑ひ飛ばせぬ齢かな

春眠のあと幾年の贅なるや

さみどりに茹づるめかぶや春隣　宮城　齋藤　泰子

勤行の背に張りつく余寒かな

春の雲沈下あらはな田水にも

添書の癖字懐かし年賀状

大寒の風押し戻す大山門（川崎大師）　神奈川　山下　健治

仲見世の飴切る音や日脚伸ぶ

献香のけむり五体に春を呼ぶ

師の快気恃みの句座や寒の明

水を吐く青銅の獅子寒明くる　神奈川　丸山　允男

掛替へし色紙に春のひかり満つ

なやらひの豆を撒きたる安堵かな

生かされて啓蟄の土踏みしむる

冬ざれの庭に一輪紅つばき　埼玉　原田たづゑ

思ひ出を手繰るや冬日穏やかに

よろこびを見つけて生くる老いの春

雪舞ふをしばし見とれて夢心地

物忘れ多きにも馴れ年暮るる　東京　原田　小芝

忘年や梅酒一本子が提げ来

毛皮着て聊か年を若く見せ

悲しさは心の奥に外套着る

PDF= 俳誌の salon

余　言

安立公彦

おもちや屋を覗いてをりし雪女　　片桐てい女

以前読んだ『北越雪譜』に、僧侶が雪中で黒髪の女に会う話があった。改めてその本を取り出して見ると、「雪中の幽霊」という一話だった。黒髪の女は「年齢三十あまりと見ゆる（略）、体は透徹るやうにてうしろにあるものも幽に見ゆ。腰より下はありともなしともおぼろげなり」。訳ありの女で、僧侶が黒髪を切ると女は消えてゆく。後日僧侶は女の供養塔を建てる、という噺だった。著者の鈴木牧之はこの女を「幽霊」と書いているが、これこそ語り継がれている「雪女」だろう。悲話である。

掲出句の雪女は如何にも現代的だ。玩具店を覗いているということから、この雪女の年頃も浮かんでくる。さらに幼な児を残して逝った母親の姿が、「覗いてをりし」に結実している。雪女の後ろ姿が哀れを誘う。

天帝の恵み賜り火水始　　西川　保子

「ひめ始」は歳時記により記載されている書と無い書がある。手許の歳時記では、「日本大歳時記」「最新俳句歳時記」「同文庫版」の三本に記載がある。さらにその解説の中で、「ひめ始」の季語には、姫始、飛馬始、姫糊始、火水始、編糠始、密事始という六つの傍題が出ている。しかし一般的には「密事始」であるとして、〈ひめ始八重垣つぐる深雪かな　龍雨〉ほかの句を載せている。

掲出の句は「火水始」。一掬の水も、一点の火も、全て造物主の賜物であるという思いを、私たちは忘れているのではないか。作者の姿勢は正しい。昔に還れというのではない。せめて正月には一考すべき道理である。

借老一気呵成に書初す　　園部　蕗郷

今年の新年大会に、作者は雪深い秋田湯沢から出席された。関東も南部に住む私たちにとっての雪は、ただ眺める対象であった。しかし今年の二月八日、十四日の豪雪は、その雪の凄まじさを、徹底的に知らされたと言って良い。作者を含む雪国の地に住む人たちは、毎年そういう体験をされているのだと言うことを、改めて自覚した。

この句、「借老」は「夫婦仲よく老いるまで連れ添う」

PDF= 俳誌の salon

こと。一気呵成」との取り合わせが実にいい。

わが影と雑木の影と二月来る　　鈴木　直充

この句、「わが影と雑木の影と」「二月来る」と読む。一読「二月」という季語の、複雑な季語感を持つ情緒が、目前に開けてくる思いがする。単数の、「わが影」と、複数の「雑木の影」の奥行きが、朝日を背にくっきりと浮かび上がる。「二月」という季語がみごとな背景を成す。

更には背景をなす「二月」が一面主役ともなっている。この句に、表現という技法の優れた一例を見る。

青あをと古都千年の九条葱　　中村喜美子

「九条葱」は京都東九条の産。葉が細く濃緑色で、白根は短いとある。「青あをと」の描写がこの「九条葱」と良く呼応する。中七の「古都千年の」も上五下五の背景にふさわしい。そして何よりもこの句の良さは、調べの素晴しさにある。一句を唱していると、「古都千年」の風物が、とりどり浮かんで来る。

待春の土やはらかく湿りけり　　佐橋　敏子

春を待つこころ弾みは老若男女に変りはない。今年のような不順な冬期の日々には、ことにその思いが深い。

寒明けも近い一日、作者は庭に立ち、植込みの土を見るともなしに見ている。ふとその土の湿りに気づいた。前日の雨の湿りがまだ残っているのだ。見ているうちに、その湿った土を触れたく思い、改めて手を添えると、えも言われぬやわらかさを覚えるのだった。この句、春を待つ思いが、やわらかな湿りを帯びる「土」とよく呼応している。

旧正や穀潰し来て千個月　　廖　運藩

「穀潰し」という言葉を聞くのも久し振りだ。それを作者の句に見ると、その言葉に何とはなしの新鮮さを感じるのはどういうことだろうか。「千個月」は八十三年。「穀潰し来て千個月」とあるが、それは作者の謙譲と言うもの。同時にこの中七、下五は、この句を見る大方の人が、或る日ふと己を振り返り思うことである。作者は春燈台北句会の指導者。「春燈」の一翼を担う人である。

よろしくと互ひに御慶老夫婦　　棗　怜子

例え偕老の間でも、新年の挨拶は欠かせない。作者ご夫妻もそのしきたりを守っているのだ。近年こういうしきたりが疎かになって来つつあるのは残念なことである。

この句、「よろしくと互ひに御慶」は、ざつくばらんな表現に見えるが、その中に「変わらぬ夫婦の愛情」が読みとれる。「老夫婦」が生きている。

PDF= 俳誌の salon